

戦後経済学史の群像：大河内一男

野原慎司（東京大学大学院経済学研究科准教授）

経済学史とは？：経済学の歴史

経済史とは異なるが、経済史との知的交流も（例えば、大塚久雄と小林昇）

一大塚久雄の研究（とりわけ、ヨーロッパ資本主義の形成）は経済学史家に大きな影響を与えた

なぜ、戦後経済学史家を研究するのか？

一文脈主義（クエンティン・スキナー）以降の、脱ウィッグ史観、脱マルクス主義史観の日本への影響。歴史に忠実ではないものとしての戦後経済学史

一しかし、戦後経済学史家の主眼は、西欧の歴史をそれ自体理解することと同時に（あるいはそれ以上に）、日本の資本主義の発展を理解するために、西欧の資本主義の発展を理解することであった。したがって、封建制や帝国主義や全体主義という問題群を、スミスを読み解くのに用いたりした（内田義彦の場合）。

大河内一男（1905-1984）は、経済学史家のみならず、社会政策論や労働組合研究など多岐にわたる研究を行なっている

一西欧の理解、それと比較しての日本の理解が、大河内の課題であった。

幼少期

大河内一男は東京下谷に、速記者で講談作家であった大河内翠山と母のみよのもとに1905年（明治38年）に生まれる。幼少期の大正時代前半には、第1次世界大戦（1914-1918年）が起きる。「船成金」や「鉄成金」。鉄屑を拾って大儲けした「ドブ金さん」

他方、庶民の貧困を反映して、河上肇『貧乏物語』がベストセラーに。

1917年のロシア革命などの影響もあり、マルクス主義・共産主義運動が盛んになり、労働組合運動も盛り上がる。1920年には、戦後恐慌がはじまる。乱闘・スト・工場占拠などが生じる。こうしたことを大河内は知っていたが、当時は東京府立第3中学校の学生であり、あまり興味を覚えず。

1923年に、京都の第3高等学校に在学しているが帰省しているおり、関東大震災が起きる。朝鮮人の襲来に備えるとの名目での自警団が結成され、大河内も駆り出される。ただ、のちには「愚かしい出来ごと」と述懐している。この頃、友人の名和統一から、マルクス『共産主義宣言』の翻訳を見せられ、大河内は夢中になる。

こうして、1926年には東京帝国大学経済学部に入學する。山田盛太郎や大森義太郎の授業を受講する。彼らは、表面上は、マルクスを教えるとはしていなかったが、実際はマルクスを教えていた。

大河内自身は、中学校の先輩でもあった河合栄治郎のゼミに入る。

河合の社会政策論は、社会政策の目的は人格の成長だとする理想主義的なものであった。同時に、スミスらの自由主義を旧自由主義とし、その自由主義が自由放任主義で国家の役割を認めなかったのに対して、河合の新自由主義は、国家の個人の福祉に対する積極的役割を認めるものであった。1920年代から30年代はマルクス主義・共産主義運動が盛んであったが、河合はそれとは一線を画する。

一社会政策論は、社会問題とその対策を考える学問で、ドイツにおいて19世紀以後に発達し、日本でも1896年に社会政策学会が設置される。1890年代から1920年代にかけては、日本での資本主義の発達により、都市化に伴う住宅問題などが生じており、都市スラムも問題となっていた。ただ、1924年には、路線対立から社会政策学会は休会。

一大河内の社会政策論は、河合とは対照的。資本主義の円滑な運動に構造上必要なものとして、社会政策論が位置付けられる。

一生産力の高度化のためには、労働力を無駄にしてはならないはずであり、したがって社会政策（一定の休憩や休息や食事など）が不可欠だとした。

一平賀肅学で、東京帝国大学を追放されることになる河合に対して、大河内はいったんは河合と行動を共にしようとしたが、結局のところ、大学に残ることになる。

一河合のファシズム批判など自由主義に対して、大河内は、あくまで、体制内での改革を志す

一その際の、生産力の増強のための労働者の協力という路線は、当時の全体主義国家日本の路線に連なるものでもあった。近衛文麿を頂点とする昭和研究会で大河内は活動もしていた。翼賛体制と大河内

#### 『スミスとリスト』（1943年）

一スミスの利己的経済人は、重商主義的特権商人と異なり、生産力の増大により国内産業を発展させようとする産業資本家。スミスの利己的経済人は、国内の経済発展のモデル。

一ただ、その後、経済人は、経済を変える倫理であることをやめ、単なる経済理論上の道具となる。

一フリードリヒ・リストは、幼稚産業を保護するために、関税は必要な時もあるとする。

一大河内は、国内市場の形成を重視した。

一その際、生産の担い手が、主体的に生産に協力することを説いた。

一大河内の、戦時体制評価はアンビバレント。生産力の近代化を戦時体制が進めることを認識しており、その点を認めていた。

#### 高島善哉『経済社会学の根本問題』（1941年）

一大河内と同じくスミスとリストを取り上げる。しかし、スミスの「市民社会」の評価に力点。平等で自由な市民からなる社会が市民社会である。その視座は、当時の日本を批判する

視座ともなった。

ー日本の自由主義は、初期の福沢諭吉や田口卯吉らによる導入のあと、1880年代には、イギリス経済学からドイツ経済学への移行などがあり、衰える。マルクス主義が影響力を持つと、自由主義はブルジョア・イデオロギーとして批判されることになる。河合栄治郎ら自由主義者も戦時体制で失墜。

ーしかし、自由主義は地下水脈で生き延びていた。それは、市民社会派として、戦後、内田義彦や水田洋に受け継がれることになる。

## 戦後の大河内

ー労働組合研究：明治の働き方（農民の出稼ぎ型労働）。戦後においても持続。出稼ぎという形態で企業別採用が実施され、企業間の賃金・労働条件の平準化が生じなかった。労働条件の企業横断的な平準化を目標とする労働組合も、本来の役目が果たせず（西欧との違い）。

ー満州事変以降の、産業報国会が、戦後の労働組合の起源

ー戦後民主主義の不十分さ

## 東京大学総長として（1963-1968年）

1966年、医師免許を得た者に1年間の低賃金労働を行わせる医局研修制度に対して、青年石連合が独自の研修制度を設ける。1967年、対抗して、政府が、2年以上研修した医師を登録医とする制度を国会に提出。その反対ストライキが、東京大学医学部で1968年1月に発生。処分への反対運動から、騒動は拡大し、6月には、学生の安田講堂占拠と、大河内総長による機動隊の突入許可が続いた。騒動はおさまらず、10月に大河内総長は辞任。

ー加藤総長代行は、学生も大学の一員として固有の権利があるとする。「大学の自治」のもとに温存されてきた権威主義への抗議が、この運動であった。

ー大河内は、「戦後の今日では、東大生が「赤門」というものに対してなんの感慨も誇りも持とうとせず、むしろ権力の象徴だなどと考えて、アジビラを張ったり火炎瓶を投げつけるものもいても誰も平気な顔をしている」と1979年に述べている。

大河内の経済学は、戦前から戦後の高度形成成長期まで、生産力の高度化が国家・社会の目標であった時代を反映している。大河内は、体制内で、労働者の境遇改善を志す。しかし、その姿勢が皮肉にも、戦後民主主義が温存させてきた権威主義への学生の批判と対立することになる。

ー大河内の思想は、戦後日本の民主主義の抱える問題そのものに関係している。

\*本報告は、拙著『戦後経済学史の群像：日本資本主義はいかに捉えられたか』（白水社、2020年）第二章に基づきます。

第一章内田義彦、第二章大河内一男、第三章高島善哉、第四章小林昇、第五章水田洋、第六章伊東光晴